ガザ

子ども支援継続中

深刻な物資不足の中で

最近、ほとんどニュースのないガザ地区ですが、実は物資不足が再び深刻になっています。国連によると、10月にガザに入った物資は6月の5%、燃料も10%しかありません。というのも、6月末にエジプトでクーデターが起こり、新たに政権についたエジプトの軍部がガザとの国境を封鎖し、人や物の出入りを制限しただけでなく、ガザへの補給路としてあった地下トンネルを壊していったからです。特に深刻なのは燃料と建設資材です。エジプトからの安い燃料に頼っていたガザの火力発電所はタービンを一部閉鎖し、従来の4分の1しか発電していません。その結果、一部地域では一日16時間の停電になっています。イスラエル側からの燃料供給は不安定なうえに高価で、当会のガザ事務所でも昼12時以降の自家発電機の使用を停止しています。アパートの上階に住んでいる家庭では水の供給にも支障が出始めました。通勤通学の足である乗り合いタクシーの台数が明らかに減ってきて、店頭から乳製品、エジプト製の食料品、日用雑貨、紙おむつなどが姿を消し始めました。人々はこれまで備蓄していた食料に手をつけ始めています。

空爆の悪夢が甦る

イスラエルとの境界線付近での衝突も増えていて、人々は昨年11月の激しい空爆（1週間で死者100人以上）を思い出して不安がっています。しかもガザを取り巻く状況は昨年よりもずっと厳しいのです。昨年の空爆前後には、エジプトを経由してトルコやアラブ諸国の首相や王族がガザを訪問するなど、ガザはアラブ世界とのつながりを持っていましたが、政変後現在は遮断され、またガザ支援は国際的にも話題に上らず、カタールなどからのハマス政府への援助も途絶えがちと言われます。孤立を深めるガザで、人々は2009年の戦争（3週間で死者1300人以上）の再来に怯えながら生活をしているのです。

ガザは新学期を迎えました

アトファルナろう学校の幼稚園には4歳児16人が新入学しました。明るくきれいな校舎に子どもたちはとても嬉しそうですが、幼くまだ手話を覚えていない彼らにとって、家とは異なる環境にくること自体がチャレンジです。9月いっぱいはお母さんたちにも幼稚園に来てもらいました。スタート時期にはお母さんたちへの指導や心理的なサポートも必要なのです。

モナ先生「この時期、ほとんど毎日電話してくる人もいるくらい家族の期待と不安は大きいです。毎月母親の会を開いて、子どもたちの生活の様子を話し合う機会も設けています。親たちはアトファルナの教育を信頼してくれますが、子どもが短期間のうちに進歩することも望んでいます。しかし子どもは少しずつ成長していくものです。そうした親たちの気持ちに向き合うことも私たちの仕事です。」

給食に野菜を提供

アトファルナでは子どもたちの栄養状態改善や集中力向上のため、給食を提供しています。貧しい家庭も多く、朝食を食べず登校してくる場合も多いからです。当会では農業事業を行っている「ナキール農場」で収穫した野菜（トマト、キュウリ、ナス、ズッキーニ、セイジ、唐辛子など）の提供を始めました。「生徒300人の給食を毎日作っていますから助かります。」とナイーム校長先生。これまでに農薬の使用量などを抑えて作った野菜約

240キロを届けました。

絵画指導

長年レバノンで絵画指導をしてきた「パレスチナのハート・アートプロジェクト」のアーティスト2人がガザを訪問し、ナワール児童館とアトファルナろう学校にて指導をしてくれました。友達、花、馬、買い物バッグ、時計などガザの子どもたちの身近にあるものをテーマとして絵画と工作にとりくむ多彩なプログラムで、小学生1～6年生のべ200人以上の子どもたちが参加しました。

「本物の果物や友達の顔を見ながら絵を描くなんて初めてだよ。こんな風に色や紙を使うことも今回のワークショップで教わった。“買いものバッグ作り”が好きだな。」（ダルウィッシュ、10歳、ナワール児童館）

ナワール児童館の子どもたちは「海はつながっている」という大きな作品を11枚作って、岩手県大槌町の子どもたちにプレゼントしてくれました。大槌町こどもセンターの壁をガザの子どもたちが描いた海が彩っています。（5ページ参照）

指導してくださったお二人に聞きました。

「子どもたちの「やった！」という達成感、満足感、喜びを共に感じられるのが嬉しいです。大槌町に贈る作品ではすごく元気に取り組んで、エネルギーが出てくるような作品になりました。楽しみにして見てほしいですね。描くことは見ること。物を見ることは本質を掴むということです。すごく大切な力です。子どもたちがそういう力を伸ばせる機会がまたあればお役に立ちたいと思います。」

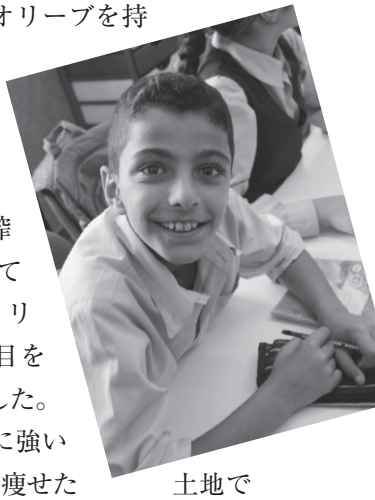
「日本でも子どもに絵を教えていますが、集中力の違いに驚きました。こうしたらとアドバイスしても日本の子どもは嫌だということが多いのですが、ここでは最初から最後まで楽しそうにやっていて嬉しくなりました。もっともっと絵を描かせてあげたいなと思いました。」

オリーブ畑への社会科見学

9月の後半、パレスチナが乾季から雨季へと巡っていく季節で最初に降る雨は、オリーブの収穫の始まりを告げる合図とされています。市場には初物のピクルスが出回り、オリーブオイル絞りも盛んに行われています。ナワール児童館では小学校1～2年生の10人が収穫中のオリーブ畑と油の圧搾工場へ行きました。「ナワール児童館」と書かれた手作り帽子をかぶっています。

農家出身のユセフ先生はオリーブのことをよく知っています。「これはピクルスでみんなが食べているスリという品種だ。こっちは油になるK18とシムラリっていうんだ。違いはわかる？」オリーブに実際に触れながら、ユセフ先生が子どもたちに説明をしていきます。ガーダ先生は、畑の横で子どもたちにオリーブについての本を読み聞かせました。

オリーブ摘みが終わったらオリーブ圧搾工場へ。近隣の農家が自分の畑で収穫したオリーブを持って、圧搾機械を借りにくるのです。子どもたちは、初めて見る圧搾機械と絞られてくる黄色いオリーブオイルに目を奪われていました。



乾燥や塩水に強い抵抗力を持ち、痩せた土地でも育つオリーブは、パレスチナの人たちから愛され、また封鎖に耐え続けるガザの人々の忍耐や回復力とイメージが重なります。しかしここでは、多くの家庭が遠出や外出をする余裕もなく、子どもたちは自然に触れ合う機会をほとんど持ちません。ガザの人口の8割は難民で土地を持っていないし、近年の急激な人口増加によって、空き地や公園などはなくなっているからです。子どもたちに新しい体験をしてもらうため、農業事業を行っているナキール農場への遠足も計画しています。